『无上法院殿御日記』にみる後水尾院サロン以降の 宮庭庭園文化

The Imperial Garden Culture after Former Emperor Gomizunoo's Salon

町田 香
Kaori MACHIDA

Abstract : This paper aims to clarify the one aspect of Imperial garden culture after Shugakuin Imperial Villa, by taking a general survey of the change of the relation between the life culture of the Princess Shinanomiya and gardens.

She spent the majority in the youth by the Gomizunoo's salon, and played many times in Shugakuin Imperial Villa. And, she obtained the detached residence in *Shchiiku*, and enjoyed a peripheral stroll based on there. Next, she obtained the other detached residence for *Sanjo*. On the tableside of the building, the lattice was made to see the street. On the backside, the pavilion (*ochaya*) was made to command scenery. The structure showed the consistency of the popular culture and the Imperial culture. She frequently went out to suburbs, and entered the popular culture in each body in the fall of life. Her living space has escalated from the garden to suburbs while receiving the influence of the change with the times of popularization of the culture.

The Imperial cultural salon and the Imperial gardens rose at the beginning of the early modern times in Japan. But the Imperial cultural salon collapsed by the death of the Former Emperor Gomizunoo. In addition, the Imperial garden culture has changed and declined because it received the influence of the change with the popularization of the culture.

Keywords: *The Imperial gardens, Former Emperor Gomizunoo's Salon, Princess Shinanomiya, Mujouhouindono-onikki, The popular culture*

キーワード：キーワード：宮庭庭園，後水尾院サロン，皇女品宮，无上法院殿御日記，大衆文化

1. 背景と目的

近世初期日本の宮廷において庭園文化が興隆し、桂離宮や修学院離宮などの傑出した庭園が創生された。これら宮庭庭園の展開過程は、八条宮智仁親王の初期桂離宮造営に始まり、八条宮2代智忠親王の第2期桂離宮¹⁾、摂政一条兼退の西賀茂山荘、良尚法親王の曼殊院庭園などを経て、後水尾院による修学院離宮の造営を頂点とし、後水尾院の崩御により終焉を迎えるという大筋で構成されているといえよう。

そして、続く近世中期以降は大名庭園が庭園史の表舞台に立つ。大名庭園の台頭の裏で、興隆を極めた宮庭庭園は後水尾院崩御以降どのような状況にあったのだろうか。享保年間における霊元院の修学院離宮御幸や、元文・宝暦年間における桂宮家仁親王の桂離宮の再興、また、禁裏関係の御庭絵図を見ても、決して近世中期の宮廷において庭園文化が停滞していたわけではないことがうかがえる。しかし、これらの史料が示す年代は享保年間以降であり、修学院離宮の造営、また後水尾院の崩御から半世紀ほど経っている。つまり、後水尾院崩御から、近世中期における霊元院の修学院離宮御幸までの50年余りにわたる宮廷の庭園文化の実態は明らかになっていない。

現在までに、近世初期日本の文化的動向である寛永文化のもつサロン文化という特徴から、宮廷文化サロンに注目しサロンの文化活動と庭園との関係性を考察してきた。具体的には、八条宮智仁親王サロンと後水尾院サロンに注目し、両サロンの文化活動の内容・構成員・場所といった要素によって特徴付けてきた。そして宮庭庭園が宮廷文化サロンの舞台として発展していく過程を明らかにし、宮庭庭園はサロン活動の場として宮廷文化サロンの興隆とともに充実し、後水尾院没後宮廷文化サロンは瓦解したことから、サロンの終焉とともにサロン活動の場としての役割を終えたとした²⁾。

そこで本研究は、隆盛を極めた宮廷における庭園文化が後水尾院崩御以降どのような変貌を遂げたのかを解明する。

具体的には後水尾院サロン最晩年期の構成員の一人、皇女・品宮に注目する。その日記『无上法院殿御日記』の解説を通じて、品宮の生活文化と庭園との関係性の変化を通観し、後水尾院崩御以降の宮廷文化サロンと庭園文化の一樣相を明らかにする。

2. 品宮と『无上法院殿御日記』について

品宮・常子内親王は、寛永19年(1642)年に、後水尾天皇の第15皇女として生まれた。生母は新中納言御局(園基音女)、同母の兄弟に第112代霊元天皇がいる。寛文4年(1664)11月12日に22歳で6歳年下の近衛基熙と結婚、寛文8年には、近世中期の代表的文化人とされる豫楽院近衛家熙を出産する。

『无上法院殿御日記』(以下、『日記』)³⁾はこの品宮の日記であり、記述期間は品宮26歳の寛文6年(1666)に始まり、没年の3年前である元禄13年(1700)まで、ほぼ毎日記述されている。17世紀後半における宮廷社会の上層に生きた女性の等身大の日常生活がうかがえることから、各方面において重要とされており⁴⁾、近世初期・中期初頭における一級資料と位置付けられる。また修学院離宮への後水尾院御幸、明正院河原御殿庭園での遊興や近衛家庭園普請など庭園、造園の記述が散見することから、近世初期の宮廷の生活文化における庭園のあり方を示す点では『隔蓑記』⁵⁾と比肩する貴重な史料といえよう⁶⁾。

3. 品宮の生活文化の変遷

(1) 後水尾院サロンの時代

近世初期の日本における宮庭庭園興隆の母胎である後水尾院宮廷文化サロンは、後水尾天皇譲位以後50年程にわたって展開したものであるが、サロン活動の内容、構成員、場所の特徴から、3期間に展開することを明らかにした。後水尾院サロンは50年程の間に徐々に縮小し、最終的には非常に家族的で狭隘なサロンとなり収束していった。『日記』の記述が始まる寛文6年は品宮25歳、後水尾院サロンの最晩年で後水尾院7、80歳の時期にあたる。

* 京都造形芸術大学

その頃のサロンの文化活動の特徴は、修学院離宮の完成によって始まる修学院御幸、成人した数多くの皇子女邸への御幸であり、サロンの構成員は主に後水尾院の皇子女とその母方の血縁であり、非常に家族的なものであった⁷⁾。

『日記』の記述が後水尾院サロンの最晩年にあたる時期から始まることを考慮しながらも、後水尾院サロンの構成員の一人としての品宮ではなく、品宮の日常生活から後水尾院サロンを照射することにより、後水尾院サロンの変容をみていきたい。まずは日記の記述が始まる青年期から生涯にわたる品宮の日常生活また文化的活動を、活動内容・活動場所・構成員（活動を共にする人物）の要素に注目し、その特徴を探った。その結果、まず青年期における主たる活動場所は後水尾院の仙洞御所と修学院離宮であり、品宮の日常はやはり後水尾院サロンに大きく依存していたことがわかった。

仙洞御所においては年中行事やサロンの遊興があるときにはもちろん、日常的に後水尾院に相伴し後水尾院の御幸先には必ず随伴していた。また後水尾院の修学院離宮御幸へ随行する一方で、修学院離宮を借りた遊興もしばしばあった。

（略）つくゝしきかりにてしゆく院へ行（略）しゆ月くはんの御庭にてつくとり、それより上ノ御池へ行、道すからもつくとり、志ゝさいへゆきしはらくありて船にのり、りんうんへ行、あなたこなた有て又志ゆ月くはんへ帰る、ゆうふかたく御過て其まゝ帰る⁸⁾

のように、個人的に女中などを伴い修学院離宮を借りた時も、下御茶屋の寿月観から上御茶屋の止々斎・隣雲亭へ行き、舟遊びをして再び寿月観に帰るといったように、後水尾院の御幸における遊興と同じ楽しみ方をしていた。

また品宮の交流相手は、妙法院堯恕法親王・青蓮院尊証法親王・一乗院真敬法親王・大聖寺永崇女王といった同母の兄弟御門主、母親である新中納言、また親類関係にある叔母方など血縁関係者が大半であり、日常的に品宮の住む近衛邸、また公家町内にあるそれらの邸を行き来していた。そのような交際関係の中での注目すべき活動は、すでにこの時期の後水尾院の皇子女邸御幸における活動として取り上げたように⁹⁾、物見の格子からの市井見物が挙げられる。近衛邸に物見格子がつくられるのは寛文9年（1669）のことであった。

（略）又内ゝの物見のかうし出来して、けふ日からよきゆへ、ちゃのゆなとしかけさせみなゝゝ同道して行、物さひたるてい、またおもしろくめつらしきやうにて、さなから山さとめきて一めん心しつか成所也（略）¹⁰⁾

この格子は後水尾院の要請により造られ、上記にあるようにもの寂たる様子でありまた山里のようでもあった。後水尾院も近衛邸御幸の度にここに訪れて、この格子から人通りを眺めていた¹¹⁾。これら公家邸における物見の格子については、後藤・松井に詳しく¹²⁾、公家邸に物見の格子が造られるのは1660年代頃からで、延宝・元禄に至って普及していくのであるが、この物見の格子からの市井見物は、品宮の没する3年前の1700年まで『日記』には通常的に記述されていることから、近世初頭末からの流行といえる。元禄という大衆文化が興隆する時代性の中で、物見格子の流行はこの時期いわゆる宮廷の最上層部と大衆文化との接近を象徴しているといえよう。

（2）後水尾院崩御後—宮廷文化サロンの瓦解と後西院との交流

延宝8年（1680）8月19日、後水尾院が85歳の生涯を終える。品宮は三人の子供を産み、40歳間じかになっており、後水尾院に依存していた品宮の日常生活は当然のように変化を余儀なくされる。後水尾院の最晩年に近づくにつれ、度重なる修学院離宮御幸相伴の記述にも若干の変化がみられるようになる。80歳近くになれば、さすがの後水尾院にも年相応の変化があらわれ「おたっしゃで」今日もお歩きになった、というような付加語が『日記』に見られるようになる。後水尾院の加齢に伴い、後水尾院没年の

数年前から品宮の後水尾院を伴わない新たな活動がはじまり、後水尾院没後に特徴的に現れ、後水尾院サロンとは異なった文化活動を展開していくのである。

後水尾院崩御後、新たに特徴的に表れてきたのが後西院との親密な関係であった。『日記』には後水尾院と後西院が入れ替わったかの観がうかがえるほど急速に後西院との交流の記述が多くなる。

同時に『日記』には今までにはほとんど記されることがなかった茶の湯の記述も表れてくる。後水尾院サロンにおいてもその遊興に茶の湯はつきものであったが、品宮の『日記』に記されることはほとんどなかった。それが、後水尾院没後には急に近衛家における茶の湯以外にも、後西院、一乗院門跡などの茶の湯が頻繁にそして明確に記述されるようになる。

後西院の茶の湯は、「茶会の場合を次々と移動させ、遊宴や芸能が伴い、その主体は茶ではなくむしろ遊宴である」といった後水尾院の影響を色濃く受けた形式であった。しかし後水尾院崩御後の延宝9年以降変化し、茶屋や亭から茶室へと茶の湯の場所が変わり、また大部分が三疊台目という小間の茶室で行われ、後段もなくなり、茶の湯のあり方が明らかに変化したとされる¹³⁾。

また、後西院の茶会に参加する大部分が血縁関係者であり、場所も小間の茶室であることから少人数であった¹⁴⁾。後水尾院の崩御により宮廷文化サロンを構成していた中心軸がなくなり、サロンは瓦解し、宮廷内の交流関係はさらに個人的で家族的なものとなっていた。後西院の茶の湯変化などに、後水尾院の崩御を境として変化する宮廷文化のあり方がうかがえる。

しかし、その後西院も後水尾院の没した5年後の貞享2年（1685）2月22日に崩御してしまう。

（3）紫竹屋敷と兄弟門跡寺院—郊外における活動拠点

後西院の没後、40歳代後半に差し掛かる頃になると、品宮は積極的に公家町外への遊興へ出掛けるようになる。主な行き先は、自身の別殿である紫竹屋敷と妙法院門跡・青蓮院門跡といった同母の兄弟門跡寺院であった。

品宮が紫竹屋敷を入手したのは延宝元年（1673）のことであった¹⁵⁾。これは後水尾院がまだ生存中のことであり、品宮は紫竹屋敷に度々出掛けていたが、足繁く通うようになるのは後西院没後のことであった。品宮の紫竹屋敷の遊興へ同伴していたのは、夫である近衛基熙や子供の熙子・家熙だけでなく、親類関係にある叔母たちや女中衆など様々で比較的少人数であった。また、後年になると品宮一人で急に思い立ち出掛けることもしばしばあった。

（略）しちくへ行、（略）てんきも大かた也、おりゝゝ時雨もあれと、これも時せつゆへおもしろし、野山のけし（ママ）もしつかなるふうけいのよし申給ひ、いつれもよろこひ也、あなたこなた同道してありく、たかゝみねのつゝきの道、おもしろき所有て、そこにて御ちやなとまいらす、しはらくなかくてちや屋へかへり、タかたく御さうはんす（略）¹⁶⁾

のように、紫竹屋敷へ向かった品宮たちは、紫竹屋敷で過ごすというよりも、そこを拠点として野歩きといった周囲散策に興じ、上賀茂、今宮社、鷹峯などへも足を伸ばしていた。

さて、後水尾院、後西院といった上皇を亡くすとはや皇族兄弟たちが依存する仙洞御所はなくなってしまった。ゆえに、兄弟門跡たちも公家町内の里坊に来る頻度が減り、青蓮院や妙法院といった自身の門跡寺院での活動比重が高まることになる。品宮の足もそれら兄弟門跡寺院へと向かうようになり、日常空間である公家町から外へと行動範囲が拡大していった。また、知恩院などに花見に出掛ける際に、青蓮院や妙法院に立寄るなども多く、品宮の活動は公家町の外にある紫竹屋敷や門跡寺院を拠点とし、さらに周辺を散策するという形を取っていった。

後水尾院存命中において青蓮院や妙法院では、花壇の花を愛で、庭で舟遊びをし¹⁷⁾、また裏山へ登り松茸狩などをしながら風景を眺める¹⁸⁾といったような、後水尾院サロンの遊興のあり方を引き

継いでいたが、時代が下るに連れ、舞や謡などを上手とする芸能者を招き入れた遊興¹⁹⁾や市井見物の拠点²⁰⁾といった性格を強めていった。

図一 品宮の行動に関連する庭園・屋敷等の概略配置図

(4) 栗田口三条下屋敷と明正院下屋敷庭園—大衆文化との交流

さて、天和3年(1683)に嫡男家熙が霊元院の女一宮との婚儀を迎え独立する頃になると、品宮の生活に新たな特徴がみられるようになる。既に時代は元禄も終わろうとしていた頃のことである。自身の別邸である紫竹屋敷を拠点とした上賀茂・鷹峯散策に加え、さらに拠点を伴わない遠距離の遊山も増えていった。また、この時期新たに栗田口三条に下屋敷を入手したことにより、品宮の活動拠点が増えた。この三条下屋敷は栗田口青蓮院門跡の近くに位置していた。

(略) 青門御地内に三条辺の町にあきやしき有て、我身もらいふしんさせ、青門よりも山に有しちや屋なとたまはり、ひかせて、それ二少たてそへ、おもてかは八人見のかうしにさせ、うらにちや屋をたて、野山をみはらすやうにしてふうけいよろしき所にたてさす (略)²¹⁾

このように、表通りには人見の格子を設けそこからの市井見物をし、裏には野山のよい風景が見晴らせる位置に茶屋を建て、山を通る人々などを眺めるといった野趣を楽しむつくりになっていた。このような構造は、自邸と同様であり、表通りには格子を設けて、裏の庭園は山里風に造るといった手法が当時の典型であり、宮廷文化と大衆文化が表裏一体となっていたことがわかる。また、この三条下屋敷は、東山一帯の花見見物時や、栗田祭り見物などの拠点として用いられていた。このことから、品宮の活動範囲が拡大すると同時に、活動内容も大衆文化の影響を受けていった。

一方、品宮40代後半に至るこの時期には明正院の鴨川沿いにある下屋敷御殿(河原御殿)への御幸に随行するといった新たな活動が頻繁化する。

明正院は後水尾院と徳川秀忠の娘・和子(東福門院)との間にもうけられた、いわゆる武家の血を引く天皇で公武合体の狭間にあった女性であり、この頃すでは60代後半になっていた。『日記』によるとこの明正院の河原下屋敷の初見は、後水尾院存命中の寛文13年(1663)4月18日であったが²²⁾、品宮が初めて招待されたのは貞享元年(1688)のことで、そこには広大な庭園が設

けられており、対岸の東河原を眺めることができた²³⁾。そして、その庭園でも特徴的な遊興が展開していた。

(略) 本院御下やしきへ御幸にて、我身もまいる、(略) みなゝ同道して御庭あなたこなたありき、御ちや屋ことのふうけいをながめあそふ、女中衆大せいまいられ色ゝちさうし給ふ、御池の中嶋二ハしほやのていをつくり、しほかま二けふりをたてゝ、おとりていそ二ハかいなとちらし、ほしあみなともかけてあり、わかめ、あおのり、うらのていの物ともとりそろへ、おもしろくしてさひたるやうす、さてゝ其まゝ浦をみるやう也、誠にとをるのおとゝのいにしへおもひ出てゝ、おもしろく一日あなたこなたとあそふ、又かたわらの御ちや屋二ハ町のていにして色ゝしほらしきもてあそひもの、つくり花なとかさきて有 (略)²⁴⁾

との記述からわかるように、平安時代すでに源融が河原院の庭園に塩竈の景を演出していたこと²⁵⁾を踏まえ、御池の中嶋に塩屋の様をつくり出し、塩竈に煙をたて、磯辺に貝などを撒き散らせ、干し網を掛け、わかめや青海苔を干し、また御茶屋を商家にみせかけるなどして庭園内に海の景を作り出した。この他にも明正院下屋敷庭園では人形操りと見物衆に見立てた人形を設えるなど趣向を凝らした遊びが展開していた²⁶⁾。こういった明正院下屋敷庭園での遊興は、『日記』を通読すると、紫竹屋敷を拠点とした周辺の野歩きや、郊外への遊山が続いていた品宮の記述において、まさに修学院離宮御幸以来の久しぶりの庭園での大きな遊興といえるが、上記のように、そのあり方は後水尾院サロンのそれとは異なっていた。また、品宮は皇女であっても、近衛家に嫁いだことからその行動には自由度があったに違いない。こうした明正院がその晩年まで、閉鎖的な環境にあったことを考えると、やはり、天皇・上皇という身分は非常に行動範囲が限定され、それゆえに最大の遊興の場が庭園であったことが改めてわかる。

(5) 拠点なしの郊外遊興と子・孫たちとの生活

元禄も半ばの江戸中期、品宮も50歳代後半に差し掛かる頃になると、青蓮院宮、妙法院宮といった兄弟が相次いで無くなり、身近な兄弟といえば奈良興福寺一乗院の真敬法親王のみとなってしまう。また、元禄9年(1696)には、自身の乳母である中務卿、異母兄弟の女五宮、そして明正院も崩御され後水尾院の皇子女も品宮を含め残りわずかになった。

しかし、晩年の品宮には新たな家族としての孫たちがいた。家熙と霊元院女一宮との間に生まれた、徳君と家久が10代を迎え品宮の行動に孫たちの関わる比重が高まっていた。これら子供たちを交えた生活も、元禄文化という時代の影響を受け、人形操りなどを熱心に孫たちが練習し、それを披露するといった記述が集中的に表れてくる。近衛邸の庭園も家熙指示のもと普請が行われ、庭園における孫たちとの遊興も散見するようになる。その様子は、後水尾院宮廷文化サロンにおける庭園での遊興が継承されながらも、サロン活動の場ではなく一家庭の遊興の風景であった²⁷⁾。

また、嵯峨や高雄などに拠点を伴わずに遠出をする頻度がさらに増えていった。嵯峨方面の時は天竜寺・龍安寺・仁和寺などに、東山方面の時は清水寺・高台寺・祇園・知恩院などを必ず訪れていた。そのような外出は、元禄時代の性格である大衆文化に直接触れる機会であった。

(略) けふはてんきよくのとかなるゆへ、ふとおもひたち花見に出る。先、きをんへ行。(略) さりなからめつらしきやうたいなるもの行ちかひとををみれば、としのころいまたやうやう十八九程のおとこ、供一人つれて、其いてたちくろき小袖にもん所有。丸のうちにあふき也。帯は今はやるおり物、むらさきうすきこきいたたみ也 (略) かさのうちにてかほ半ふん程はみなかくるゝ程にしめてとをくよりみれば、めより下、ほふかふりのやうにみゆる。はななみの所をなるほとふくらかし、はななみふくろ少出かけ、何やらんたてさうなる色みゆる。人きやう絵などにいさ(ママ)やうのものもつくり、かきたるも多。人にてみゆる事はじめゆへ、さてゝいぎやうなるてい、めをおとろかす。世間のは

やりたるていをつくしたるなるへし。さてさてすさましき、いやうなるものすきと誰にもものかたりす (略)²⁸⁾。

上記のように祇園を訪れた際に見た、流行の異形の体をなす若者たちの豪華華麗ぶりを品宮は事細かに記述している。物見格子越しに触れていた大衆文化については直接入り込む状況に、宮廷が徐々に大衆文化の影響を受けるという時代背景がうかがえる。

4. 結論

品宮の青年期から晩年にわたる生活文化を通観し、その時々々に特徴的な状況を庭園との関係から明らかにしてきた。

まず活動場所という点からは、後水尾院仙洞御所、後西院新院御所といった仙洞御所を軸としながら、公家町内の親類邸への行き来をしており、活動の範囲は公家町内に集中していた。郊外への外出といえば後水尾院に付随しての修学院離宮、また自身の領地である幡枝地方であったが、後水尾院が高齢になり修学院離宮御幸の頻度が減少するに伴い、紫竹へ自身の別邸を入手することになる。後水尾院崩御後にはこの紫竹屋敷を拠点とし、鷹峯や上賀茂などの周辺散策といった野歩きを楽しむようになり、庭園での遊興の記述が減少していく。もちろん記述がなくとも自邸の庭園で舟遊びをしたり、御茶屋で風景を眺めたりといった遊興は通常的にあったであろう。さらに妙法院や青蓮院といった、同母の兄弟門跡寺院へ足を向け、各寺院においては、山に登るなどするとともに、庭園での舟遊びなども繰り広げられた。こうした場所は、増え始める郊外への外出の拠点として働いていたといえ、品宮は青蓮院近くに新たな下屋敷をも入手し、ここを拠点に東山方面の散策に興じていた。そして、ついには拠点を伴わない郊外への外遊が徐々に通常化していった。

つまり、修学院離宮で青年期を過ごした品宮は紫竹屋敷といった別邸を入手したが、これは修学院離宮のように郊外遊興の目的地ではなく、あくまで紫竹屋敷が周辺散策の拠点であった。そしてさらに、拠点を伴わずに郊外へ外出する頻度が高くなり、品宮の活動範囲は拡大していった。

このような品宮の活動範囲の拡大から、近世初期に興隆した宮廷の庭園文化であったが、修学院離宮ないしは後水尾院崩御以降、宮廷文化の活動形態が庭園での遊興から郊外への遊山へと大きく変化していった様子がうかがえる。

また、後水尾院崩御を境に宮廷文化活動のあり方は一変し、サロンの文化活動ではなく非常に個人的で家族的な文化形態に移行する。それが後西院の小間の茶室を使った茶の湯など、10人前後からなる後水尾院のサロン形態では聊か無理のある状況の発生からうかがえる。

さらに、活動内容は大衆文化への傾倒が特徴的といえる。近世初期末から宮廷の生活空間は、市井見物のための物見の格子を屋敷の表側に、裏には御茶屋や舟遊びのための池を擁した宮廷特有の庭園文化が息づく空間を設けるといったように、大衆文化と宮廷文化が表裏一体にある造りになっていた。さらに宮廷文化という枠を乗り越え、郊外へと身体ごと入り込み大衆文化に直接触れる状況に至るが、これは近世中期の元禄文化という大衆文化へ向かう、時代変化の影響を受けたものであったといえよう。

つまり、品宮の生活文化と庭園との関係の変化から、後水尾院サロン以降の宮廷庭園文化の一樣相として、宮廷が大衆文化の影響を受けていくという時代背景の中で新たな価値観が加わり、宮廷の文化活動の行動範囲が庭園から郊外へと拡大していったという状況が浮かび上がってきた。

謝辞：財団法人陽明文庫には貴重な史料閲覧の機会をいただくとともに、文庫長名和修先生には様々なご教示を賜った。末筆ながら御礼を申し上げる次第である。

補注及び引用文献

- 1) ここでは便宜上初代智仁親王造営を初期桂離宮、2代智忠親王造営を第2期桂離宮とする。
- 2) 町田香 (2003): 八条宮智仁親王サロンの主要な活動と構成員: ランドスケープ研究 66 (5), 372 - 374, 町田香 (2004): 八条宮智仁親王サロンの形成と展開にみる固有性と時代性: ランドスケープ研究 67 (5), 397 - 402, 町田香 (2006): 後水尾院サロンと宮廷庭園の展開: ランドスケープ研究 69 (5), 343 - 348
- 3) 自筆本は陽明文庫所蔵, 全36冊, 原題は「日々記」。東京大学史料編纂所にも写本があるが, 本論では陽明文庫所蔵本を用いた。
- 4) 後藤久太郎・松井みき子 (1989): 无上法院日記にみる茶屋: 生活科学研究所研究報告 21, 瀬川淑子 (2001): 皇女品宮の生活『无上法院御日記』を読む: 岩波書店。
- 5) 『隔笈記』: 1997: 思文閣出版
- 6) 庭園史研究においては, 修学院離宮御幸の記述が部分的に使われることが多い。森蘊 (1954): 修学院離宮の復元的研究: 奈良国立文化財研究所学報 第二冊など
- 7) 町田香 (2006): 後水尾院サロンと宮廷庭園の展開: ランドスケープ研究 69 (5), 343-348
- 8) 日記: 寛文8年2月26日条。
- 9) 7)346-347
- 10) 日記: 寛文9年11月28日条。
- 11) 日記: 寛文10年8月20日条。(略) 法わうへ参 (略) あけの宮の御かたへもなる, かうしにて志はらく人とをり御けん物ありてやかてくはん御。
- 12) 松井みき子・後藤久太郎 (1996): 「无上法院日記」にみる「格子」と「物見」(「格子」と「物見」上): 日本建築学会計画系論文集 486, 松井みき子 (1998): 公家邸指図にみる「物見」(「格子」と「物見」下): 日本建築学会計画系論文集, 508
- 13) 谷端昭夫 (2005): 公家茶道の研究: 思文閣出版, 275
- 14) 後西院御茶之湯記 12), 361-377
- 15) 日記: 寛文13年9月28日条。(略) 紫竹に屋敷をもとむ, 柳原知行の内也, けふ日からよきゆえ, うけとらする, 日とひ法わうよりはいいりやうす銀子此ため也, 内義志つらひ出きて, けふうつる, (略)
- 16) 日記: 貞享3年10月9日条。
- 17) 例えば, 日記: 寛文10年3月25日条。(略) 妙法院宮へ行, 今程藤かきつはたさかりにて庭のおもてみ事さいふはかりなし, 池有て船にものりあなたこなたとあそぶ (略)
- 18) 例えば, 日記: 寛文9年9月27日条。しやうれん院宮へ新中納言殿, 内府同道にて行, やまの松たけとり, ちゃ屋にてしはらくけいをなかめ (略)
- 19) 例えば, 日記: 貞享5年7月16日条。青門へ行 (略) 夕かたく御過て庭へ行たかき所より野山の火ともけん物す, 見事なる事也, 夜二入しまやうたい有まいもあり, 松之すけも同道してまいりおや子ともにまふ (略)
- 20) 例えば, 日記: 元禄5年9月14日条。(略) それより青門へないゝゝ御やくそくて天王のまつりの夜ミやけん物二行 (略)
- 21) 日記: 元禄元年12月12日条。
- 22) 日記: 寛文13年4月18日条。本院御下やしき御道にて御たちより御らん也, かねての御あらましゆへ本院よりかきの御座などさゝせられ, 御ちやのこなともまいらせらるゝ, 草花とも多有てひろき事也 (略)
- 23) 日記: 貞享5年3月26日条。(略) 本院御下やしきへ御幸にて, 我身もまいる (略) 御やしきはしめてみる, さてゝひろく, 御庭の御ものすき見事さ, 所ゝの御ちゃ屋けいよく, 中々おもしろさおもしろさ。あなたこなたとして一日なくさみ, 色々さまゝの御ちさう也。ひかしの河原も三條のはしなとまでもみえてよきけい也 (略)
- 24) 日記: 元禄元年10月14日条。
- 25) 「宇治拾遺物語」: 日本古典文学大系 27 (1978): 岩波書店, 345
- 26) 日記: 元禄4年4月13日条。(略) 百まんへんに万日のゑかう有て, さんけいの人, 河原をたんとゝゝとをる, よき御なくさみにて, いづれもけん物す, 其うへ御庭にも人きやうのつくりもの有, あやつりのてい, けん物の人なとおもしろくしてあり, 御きやく衆への御もてなしにとて仰つけられ, 市岡つしまの守 (市岡対馬守政房) さいかく, ものすきのよし也, 上下ともになかめ出てしはしはにきにきなり。
- 27) 日記: 元禄11年4月14日条。(略) けふハ子たちもよほしにて, 庭にちゃ屋のていをして, せん水のうへ二床などならへ, おもしろくしつらひ, ちゃ屋の道具ともととりそろへ, めしつかひのものともあそひ人にいたゝせ, きやうをもよほさるゝ (略)
- 28) 日記: 元禄4年3月22日条。